

火伏せ（ひぶせ）

火伏せは、火災を防ぐことをさします。昔の家は、木造で、草ぶきの屋根※となっていたので燃えやすく、火事は大変恐れられたものでした。そのため、火災を防ぐためのおまじないをする風習が多くあります。

※草ぶきの屋根＝わらなどの草で覆われた屋根。

〈火伏せの説明〉

料理をする、暖を取るなど、「火」は、生活していくためには欠かせないものですが、火事になると大変なことになる、恐ろしいものでもあります。

昔は、家も燃えやすく、火を消す設備も十分に整っていなかったため、一度火事が起きるとなかなか火が消えませんでした。

そのため、人々は神仏に祈ったり、おまじないをしたりして、火事を出さないように気を付けました。

火事は、現代でも十分に気を付けなければいけないことです。

乾燥が激しい季節になると、消防車が鐘を鳴らしながらゆくり地域を回ったり、自治会で拍子木を鳴らしながら声高らかに「火の用心!」と呼びかけていたりして、各地域でも火事に気を付ける意識を高める運動をしています。



〈“火事を出さないように”

おまじないの例〉

- 火事を防ぐ神仏の社寺（例えば古峰神社、愛宕山神社など）のお札を貼る。
- 屋根の煙が出るところなどに「水」や「龍」の文字を書く。
- 十二月十二日に十二歳になる子どもに「十二月十二日火の用心」と書いてもらった紙を貼る。
- おかま様（火をつかさどる神として、かまどや台所にまつられる神）をまつっているしめ縄を取り外し、屋根をふき替えるときにその縄を屋根に納める。

～とちぎ人の想い～

昔、小さい半紙に「十二月十二日」と書いて、火を使う周辺の柱に貼りました。一日一日を「火に用心」して過ごせるように行うものだと、伝え聞いてきました。